114學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(3)
講題：古代人文知的形成與漢籍

曹景惠

(2025.10.02)

摘要

本演講主題為「從日中思想交流的視角看日本中世文學——以儒・釋・道的影響為中心」，主講人曹景惠教授自台灣大學日文系畢業後，赴日本岡山大學留學即開始研究日本中世文學，其問題意識是因日本遣唐使至中國取經，帶回中國當時先進的各種文物，使中世日本文人鑽研中國傳統典籍文獻及註解，深度影響日本文學的發展。演講主題主要從儒、釋、道的角度看《徒然草》、《沙石集》、《雜談集》、《天地靈覚秘書》等日本中世文學的中日思想相互影響關係。

1. 《徒然草》，由兼好法師（1283-1358）於鎌倉幕府末期，元德二年（1330）左右撰寫的隨筆，主題反映中世時代的無常、死亡、自然美觀等問題。著作內容多見作者閱讀《白氏文集》、《老子》、《莊子》等諸多來自中國的著作，顯現兼好法師多方涉獵各類漢籍。在《徒然草》中，也發現諸多引用《論語》、《論語義疏》的章句，在當時的知識分子從小就要閱讀漢文，除直接抄寫四書五經的原著外，也透過注釋書理解其原著的含意。甚至在《花園院宸記》中可得知天皇將撰寫儒家書經及注釋作為日常功課，以便與朝臣談論道理；此外，除儒教思想之外，《徒然草》中也能窺見《老子》思想的片鱗，目前所知日本最早的《老子》古抄本為奈良「聖語蔵」《河上公注》下卷，這些古抄本都是以《河上公注》為底本，可推測《河上公注》在鎌倉時代至室町時代中期以前廣為文人接受與運用。
2. 《沙石集》，由僧侶無住道曉(1226-1312)在鎌倉幕府中期，弘安六年(1283)撰寫，在文章中除引用佛教書籍外，也常看到清楚引用《老子》、《論語》等書。對照《沙石集》及《老子河上公注》等相關文章，都能了解無住道曉吸收並深化儒、道思想；《雜談集》是無住道曉在80歲，應同佛門的邀請，費時一年撰寫的著作，除了闡釋佛法的道理之外，亦論及一般俗事。如同《沙石集》一樣，對照《雜談集》及《老子河上公注》中的文章，皆可窺知無住對於《老子》思想的見解。
3. 《天地靈覺秘書》，其傳本共有三個版本，從最古老的真福寺本（1288）、神

宮文庫本（1732）與高野山真別處本（1664）。在比對《天地靈覺秘書》與佛教的《圜悟心要》、《傳心法要》和道教的《老子河上公注》，從天地創造到神明及人類的誕生，可得知其受到儒釋道影響的內涵。

以上所見的日本中世文人及僧侶在接觸中國漢籍後，內化成教育日本庶民、撰寫文學著作的養分，形成從中國傳入日本，從皇室貴族僧侶傳入庶民的知識流動。最後述及研究儒、釋、道等書籍與思想在日本如何被接受、理解，並探討其在日本思想文化的形成中所扮演的角色，這個領域不僅屬於日本研究的範疇，同時也是對整個東亞知識體系的解明，相關內含皆有助於東亞文明的發展。

徐興慶 整理
2025.10.07

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(3)
講題：古代における人文知の形成と漢籍

曹景惠

(2025.10.02)

要旨

本報告は「日中思想交流の視座から見る日本中世文学—儒・釈・道の影響を中心に」日本中世文学における儒教・仏教・道教思想の受容と展開を、日中思想交流の観点から再検討するものである。報告者は台湾大学日本語文学科卒業後、岡山大学に留学し、日本中世文学研究に従事してきた。研究の根底にある問題意識は、遣唐使によって中国の典籍・文物がもたらされた後、日本の文人・僧侶がいかにこれらを内在化し、自国の文学的・思想的伝統を形成していったかという点にある。

まず、『徒然草』について、兼好法師（1283–1358）が『白氏文集』『老子』『荘子』『論語』『論語義疏』など中国の典籍を参照し、無常観・死生観・自然美意識などを独自に展開した点を考察する。当時の知識層が四書五経や注釈書を通じて儒教的素養を涵養していたこと、また『老子河上公注』が鎌倉から室町期にかけて文人層に広く受容されていたことを指摘する。

それから、無住道曉（1226–1312）僧侶による『沙石集』および晩年の『雑談集』を取り上げる。両書には仏教説話に加え、『老子』や『論語』の引用が頻出し、儒・道思想を仏教的世界観の中に取り込む試みが見られる。『老子 河上公注』との比較により、無住の思想的深化の様相を明らかにする。

さらに、『天地霊覚秘書』を、真福寺本（1288）、高野山真別処本（1664）、神宮文庫本（1732）の三伝本をもとに検討する。天地創造や人間誕生の記述には、『圜悟心要』『伝心法要』などの仏教典籍、および『老子河上公注』等の道教文献の影響が顕著に認められ、儒・釈・道三教の思想融合がうかがえる。

これらの分析を通じて明らかとなるのは、中国の漢籍を媒介とした知の流動である。すなわち、文人・僧侶を中心に形成された知識が、皇室・貴族から庶民層へと伝播し、日本思想文化の基層を構築した。本研究は、日本中世文学における儒釈道思想の受容を通じて、東アジア知識体系の連続性と相互作用を解明し、東アジア文明史研究に新たな視座を提供するものである。

キーワード：日本中世文学、儒釈道思想、徒然草、沙石集、雑談集、天地霊覚秘書、日中思想交流、漢籍受容

中国語要旨・まとめ 徐興慶
日本語翻訳 徐興慶
2025.10.07